

007 / カジノ・ロワイヤル

2006(平成18)年12月4日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝マーティン・キャンベル／出演＝ダニエル・クレイグ／エヴァ・グリーン／マッツ・ミケルセン／カテリーナ・ムリーノ／ジュディ・デンチ／ジャンカルロ・ジャンニーニ／ジェフリー・ライト／セバスチャン・フォーカン (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給・2006年イギリス、チェコ、ドイツ、アメリカ映画・144分)

……世界を股にかけたテロリスト相手の任務達成が困難なことは過去20作と同様だが、今回はCGを使わず肉弾戦アクションを満載している点をじっくりと楽しみたいもの。今回新たに誕生した6代目ジェームズ・ボンドは、バクチには強いが女には意外と真面目……？ したがって、一瞬純愛ドラマ風の展開になるが、それも時の流れ……？ しかして、その結末は……？ そして本来の任務の達成は……？

シリーズ21作目はブリークセル……

皆さんはブリークセル (Prequel) という映画ビジネス用語をご存知だろうか？ これは私が12月3日(日)に映画検定3級の試験を受けるについて勉強した結果、習得した知識の1つ。ブリークセルとは、「続編が作られる際はキャラクターのその後を描くのがほとんどだが、キャラクターが死亡したりしてストーリー展開が無理な時は前日譚を描くことになる。続編だが、時間的には前の話となる場合に使われる言葉。『明日に向かって撃て!』(69年)のブリークセルが『新・明日に向かって撃て!』(79年)」と解説されている(『映画検定 公式テキストブック』175頁参照)。

殺人鬼レザーフフェイスことトーマス・ヒューイットの誕生物語に焦点をあてた『テキサス・チェーンソー ビギニング』(06年)やバットマンの誕生物語に焦点をあてた『バットマン ビギンズ』(05年)と同じく、『007/カジノ・ロワイヤ

ル』はジェームズ・ボンドの誕生物語に焦点をあてたもの。

すなわち、『007』シリーズ21作目は、ジェームズ・ボンド役にはじめてダニエル・クレイグを起用しただけではなく、ストーリーも思い切って“00（ダブルオー）”（殺しのライセンス）昇格に至る直前のジェームズ・ボンドを描くプリークェル（方式）としたのが特徴。そんな21作目以降の新たなスタートを予知させる物語にしたためか、CGを駆使してやたらスケールアップを狙うよりも、人間の技の限界に挑戦という現実味タップリのアクションを強調しているのも本作の特徴。すると、ボンドガールにも大きな変化が……？

ボンドガール その1 ソランジュは？

この映画にはボンドガールが2人登場するが、その第1のソランジュ（カテリーナ・ムリーノ）は、前半のちょっとしたお飾り程度のボンドガール……？ ソランジュはテロリストに武器や情報を売っているディミトリオスの妻。6代目ボンドの美女への接触の仕方は歴代ボンドと同じく見事で、ちょっとした決めゼリフでソランジュを車に乗せ、部屋の中へ招き入れたかと思うとたちまちベッドイン……。そんなソランジュのケイタイに夫のディミトリオスから「今日はこれからマイアミへ飛ぶので帰らない」との連絡が入ったものだから、「今日は一晩中オーケーよ」とソランジュからボンドに迫る状況に……。ところがどうも、このソランジュはボンドの本命ではなく、単にディミトリオスに近づくための手段だったよう……。ディミトリオスがマイアミへ飛ぶとの情報を引き出したボンドは、追加のシャンパンとキャビアを注文した後、ソランジュを1人置き去りにしたまま、本来の任務遂行のためディミトリオスが行くマイアミへ。そんな中、ディミトリオスにもそしてソランジュにも大きな悲劇が……。

ボンドガール その2 ヴェスパー・リンドは？

第2のボンドガールとして登場する財務省からの監視役のヴェスパー・リンド（エヴァ・グリーン）が、6代目ボンドの本命ボンドガール。しかも今までの『007』シリーズと大きく異なる設定は、それまでプレイボーイの極致のようなボンドが、今回に限り（？）本気でボンドガールを愛すること。もっとも、ヴェス

パーに対する愛と任務遂行の葛藤に悩むというのならまだしも、いとも簡単に(?) 任務を放棄し、辞職届を出すことになるから驚き……。

それほどまでにボンドを本気にさせるボンドガールは歴代最高の美女でなければならぬが、そのお眼鏡に適ったのは、私が『キングダム・オブ・ヘブン』(05年)で、「その彫りの深い顔はのっぺらぼうな顔だちの日本人(?)には到底太刀打ちできない美しさ」と評したエヴァ・グリーン(『シネマルーム7』36頁参照)。最初は美貌と知性をハナにかけてツンツンしているイヤな女と思っていたボンドだったが、少しずつ彼女の聡明さの内側にあるやさしさや弱さを知っていく中、彼女のためなら命を捨ててもいい、さらに仕事を捨ててもいいと思うほどに……。つまり、『007』シリーズも21作目は、「美しくも切ない愛の物語」が1つの売り……。

緊張感を共有できないワケは……？

この映画ではポーカー(ゲーム)が大きなウエイトを占めている。なぜなら、数字に天才的な才能を持ったポーカーの達人ル・シッフル(マッツ・ミケルセン)を相手に戦われるポーカーゲームのための軍資金には1500万ドル(約15億円)という莫大な国家予算がつき込まれるのだから。無責任な公務員なら国の予算でバクチができると喜ぶかもしれないが、ル・シッフルはテロリストへ資金を提供している「死の商人」だから、ポーカーでのボンドの敗北は国家予算をテロリストに合法的に提供してしまうことになるから、戦う人間の責任は重大。

それはすべての観客にわかるのだが、残念なのはスクリーン上で戦われるポーカーゲームのルールや掛け金のかけ方がよくわからないこと。映画鑑賞後、ネット情報で調べたところによれば、この映画でのポーカーゲームはテキサス・ホールデムというやり方らしい。つまり、各プレイヤーには2枚の手札が伏せて配られ、コミュニティカードと呼ばれる共有カードが全部で5枚場に開かれるもの。また、このゲームはトーナメントという形式で、順位で賞金が決まる方法だし、かけ方の方法はいくつかあるうちのノーリミットという方法とのこと。日本人にとってポーカーはあまりポピュラーなゲーム(バクチ)ではないから、スクリーン上で展開される、これらのルールやかけ方を前提とした手に汗握るゲーム(バクチ)の展開が十分理解できないのは残念。そして、そのためゲームの緊張感を

共有できないことになるのはもっと残念……。

拷問に耐えるジェームズ・ボンドもステキ……？

『007』映画では、ボンドは必ず1度は捕らわれの身となり、窮地に陥るのが鉄則……？ 今回は、せっかくポーカーゲームでル・シッフルに勝利したにもかかわらず、その直後拉致されたヴェスパーを助けるべく車を走らせていたところ、道路に転がされたヴェスパーを一瞬避けようとしたため車が転覆してジ・エンド。

その後のお楽しみ(?)は、ヴェスパーからは口座番号を、そしてボンドからは暗証ナンバーを吐かせるための、ル・シッフルによる拷問のお手並み……？

隣の部屋にいる(?)ヴェスパーからは悲鳴しか聞こえてこないため具体的にどんな拷問を加えているのかわからないが、ボンドに対しては両手両足を縛って丸裸にしたうえ、座る部分をくり抜いたイスに座らせるのがまず導入部。さて、これからどんな拷問が加えられるのかと興味深く(?)観ていると、ル・シッフルのそれは、紐で結んだ大きな玉をイスの下から男の急所に向けてぶち当てるもの……。K-1の試合でも、偶然「急所打ち」になれば試合を中断して休憩させてくれるほどのどうしようもない痛みだから、こりゃたまらない……。そのうえ、痛みだけならまだいい(?)が、何度もそんな打撃を加えていくと男性機能を失ってしまうことになるらしい。したがって、こりゃさすがのボンドも降参……。

と思ったら、ここでのボンドの居直りぶりはさすがエリートスパイと感心させられるものだった……。「死んでも暗証番号は吐かない。俺が死ねばお前もテロリストから消されることになる！」と逆に脅しをかけたから大したもの。こんなに真面目に己の身体を張って拷問に耐えるボンドの姿は、これまでの『007』映画20作の中でも珍しいのでは……？ そして、筋肉隆々とした肉体美を披露しながら拷問に耐えるボンドもステキ、と多くの女性客はため息をついたのでは……？

一体誰を信じれば……？

やっとの思いでル・シッフルの拘束を逃れることができたボンドは、ヴェスパーと共に傷ついた身体を休めていたが、その前にやらなければならないのは、ポーカーゲームで勝利して獲得した賭け金を国家の会計に振込・送金すること。ス

イス銀行の担当者が持参したアタッシュケースの中には、ボン드가暗証番号を入力さえすれば直ちに振込・送金される装置が入っていたから、ボン드가それをやればすべて完了。ところが、ここで思いがけないことが……。

それは、寝そべっていたボンドは自分で入力するのが面倒だったため(?)か、「君がやってくれ」と言いながら暗証番号を口頭で述べて、入力作業をヴェスパーにやらせたこと……。こんなシーンを観て、「こりゃ何か怪しい」と思ったのは私1人だけではないはず……。すると案の定、スイートルームのベッドの上でじゃれ合い、愛し合っていた2人だったが、急遽ヴェスパーは「銀行に行かなくちゃ」ときた。そして、ヴェスパーが出かけたとたん、ボンドのケイタイにM(ジュディ・デンチ)からの「送金はまだか?」という電話が……。こりゃ一体ナニ……。ひょっとして、ボンドは命をかけて救った美女ヴェスパーに裏切られたの……。これでは一体誰を信じればいいのか……。さあ、物語はここからさらに風雲急を告げてくるが、後は映画を観てのお楽しみに……。

やはりCGよりホンモノの方が……

シリーズ21作目は、CGを使わずホンモノのセットを使って3つの迫力あるアクションシーンを撮影しているのが大きな特徴。そのうちの2つ、すなわち、①マダガスカルのビル建設現場での爆弾男モロカの追走劇と、②マイアミ空港でお披露目される最新の航空機の爆破をめぐる展開される爆弾男カルロスとのカーチェイスでは、ボンドの格闘技の見事さだけでなく、脚力のすばらしさに注目したいもの。さらに③ヴェニス建物内での攻防戦によって爆破された建物全体が海に沈んでいく中、エレベーター内に閉じ込められたヴェスパーを海中で救出するアクションも圧巻!

これらはもちろんCG撮影も可能だが、やはりホンモノの迫力が1番。6代目ボンドに就任したダニエル・クレイグがいかに張り切ってその役を演じ切ろうとしていたかが、こんな迫力あるアクションを見ればよくわかるというもの。したがって、続く第22作にもダニエル・クレイグのボンド役が決まったというのは、この21作目とことんボンド役になり切ったことのごほうびかも……。

2006(平成18)年12月7日記